

## 4. まとめ

### 4.1 空間 $\gamma$ 線線量率

対応基準値（200nGy/h）を超えた結果はなかった。

空間 $\gamma$ 線線量率について、平成22年1月から12月の調査期間における平均値、最大値、最小値等を算出するとともに、その変動範囲及び変動要因について解析を行った。空間 $\gamma$ 線線量率の変動範囲は、過去3年間の変動範囲とほぼ同程度であった。降雨時または降雪時に空間 $\gamma$ 線線量率の上昇は認められたが、 $\gamma$ 線通過率に異常は見られず、人工放射性核種の影響は認められなかった。

### 4.2 大気浮遊じんの全 $\alpha$ ・全 $\beta$ 放射能濃度

6時間測定値について、対応基準値（通常の全 $\beta$ /全 $\alpha$ 放射能濃度比の1.5倍）を超えた結果はなかった。

大気浮遊じんの全 $\alpha$ ・全 $\beta$ 放射能濃度及び全 $\beta$ /全 $\alpha$ 放射能濃度比についての平成22年1月から12月の調査期間における平均値、最大値、最小値等を算出するとともに、その変動範囲及び変動要因について解析を行った。大気浮遊じんの全 $\alpha$ ・全 $\beta$ 放射能濃度の変動範囲は、過去3年間の変動範囲とほぼ同程度であった。全 $\beta$ /全 $\alpha$ 放射能濃度比に異常は見られず、人工放射性核種の影響は認められなかった。

### 4.3 対応基準値（全 $\beta$ /全 $\alpha$ 放射能濃度比）

平成22年に竜飛岬測定所及び対馬測定所において自動測定装置が更新されたが、更新前後の全 $\beta$ /全 $\alpha$ 放射能濃度比の平均値に差が見られなかったことから、対応基準値は更新前と同じ値を用いることとした。